

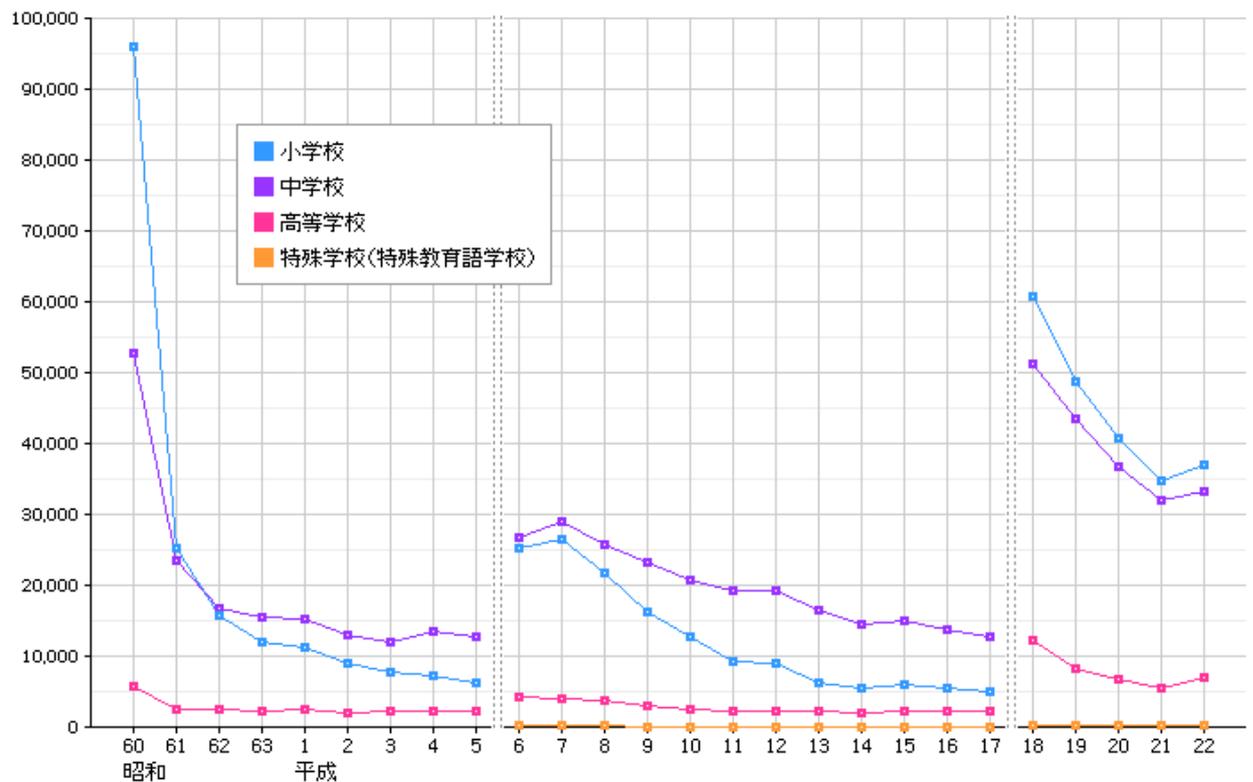
いじめはなぜなくなるのか？

I はじめに

今、いじめは深刻な社会問題になっている。いじめが原因で自殺してしまったといったニュースを見るといろいろと考えさせられる。本論文ではいじめというものがなぜなくなるのかを考察することを目的とする。そのためには、具体的な事例を挙げていじめの実態や起こった原因を考察する（第II章）。次に人間の精神面からいじめが起こる原因を考察する（第III章）。以上のことからいじめがなくなる理由を考察する（第IV章）。

II いじめの実態

そもそもいじめとは弱い者に対して個人もしくは集団で意識的に、精神的あるいは肉体的な苦痛を与えることである。与えられた本人は、想像を絶する苦しみを味わうことになる。今いじめの実態はどのようになっているのか？下の資料を見てほしい。



いじめの認知(発生)件数の推移

	60年 度	61年 度	62年 度	63年 度	元年度	2年度	3年度	4年度	5年度	6年度		
小学校	96,457	26,306	15,727	12,122	11,350	9,035	7,718	7,300	6,390	25,295		
中学校	52,891	23,690	16,796	15,452	15,215	13,121	11,922 -	13,632	12,817	26,828		
高等学校	5,718	2,614	2,544	2,212	2,523	2,152	2,422-	2,326	2,391	4,253		
計	155,066	52,610	35,067	29,786	29,088	24,308	23,062	23,258	21,598	56,601		
	6年度	7年度	8年度	9年度	10年 度	11年 度	12年 度	13年 度	14年 度	15年 度	16年 度	17年 度
小学校	25,295	26,614	21,733	16,294	12,858	9,462	9,114	6,206	5,659	6,051	5,551	5,087
中学校	26,828	29,069	25,862	23,234	20,801	19,383	19,371	16,635	14,562	15,159	13,915	12,794
高等学校	4,253	4,184	3,771	3,103	2,576	2,391	2,327	2,119	1,906	2,070	2,121	2,191
特殊教育 学校	225	229	178	159	161	123	106	77	78	71	84	71
計	56,601	60,096	51,544	42,790	36,396	31,359	30,918	25,037	22,205	23,351	21,671	20,143
	18年 度	19年 度	20年 度	21年 度	22年 度	注 1)平成 5 年度までは公立小・中・高等学校を調査。平成 6 年度からは特殊教育諸学校、平成 18 年度からは国私立学校、中等教育学校を含める。 注 2)平成 6 年度及び平成 18 年度の調査方法を改めている。						
小学校	60,897	48,896	40,807	34,768	36,909							

中学校	51,310	43,505	36,795	32,111	33,323	注3)平成17年度までは発生件数、平成18年度からは認知件数。
高等学校	12,307	8,355	6,737	5,642	7,018	
特殊教育学校 (特殊教育諸学校)	384	341	309	259	380	
計	124,898	101,097	84,648	72,778	77,630	

「平成22年度 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」より

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/08/_icsFiles/afieldfile/2011/08/04/1309304_01.pdf

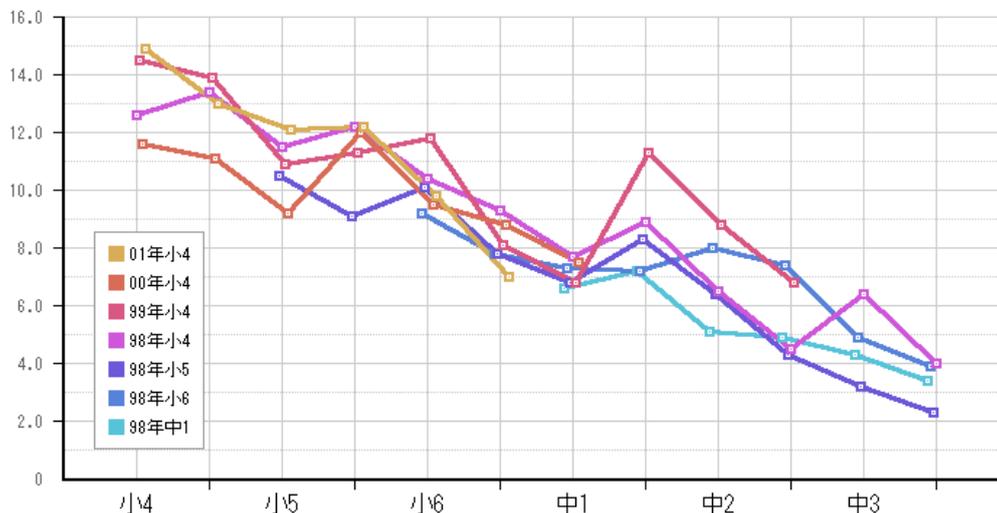
この資料からわかるようにいじめというのは今も昔も増えたり減ったりはしているものの、けして無くなってはいないということだ。いじめに関する報道が続くとあたかも「いじめが増えている」と認識してしまいがちだが、報道の多い少ないに関係なくいじめはずっと一定の数存在し続けているのだ。

(1) いじめの多い時期

いじめは起こりやすい環境と起こりにくい環境があります。次のグラフによると中学校より小学校のほうが、起こりやすく学年が進むにつれて徐々に少なくなることがわかる。

被害経験の学年進行による推移: (7 学年分・男女)

いじめ被害: 仲間はずれ・無視・陰口: 週に 1~2 回

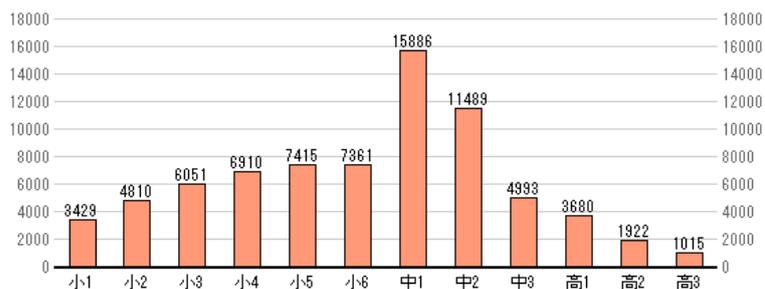


国立教育政策研究所・文部科学省編

『平成 17 年度教育改革国際シンポジウム「子どもを問題行動に向かわせないために ～いじめに関する追跡調査と国際比較を踏まえて～」報告書』より (<http://www.nier.go.jp/symposium/sympoH18/h17sympo18221j.pdf>)

その一方で文科省の統計では、「認知件数」のピークが中学 1 年、2 年の時期にあることがわかる。

学年別いじめの認知件数



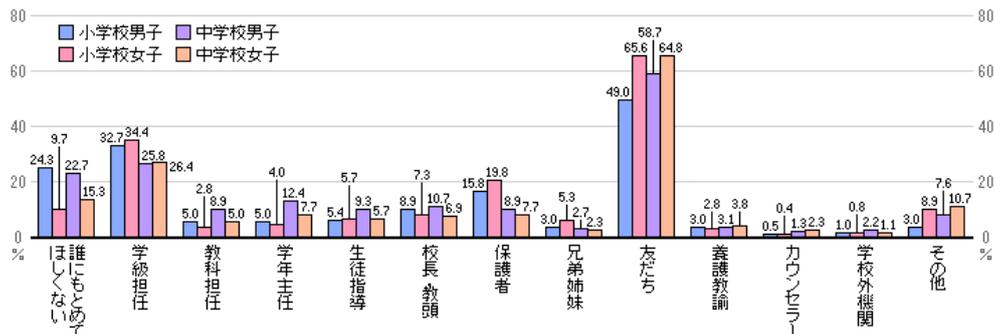
「平成 22 年度 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」より

(http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/08/_icsFiles/afieldfile/2011/08/04/1309304_01.pdf)

特に中学生男子のいじめは、小学校に比べて、「頻繁化・長期化」しやすい、すなわち「深刻化」しやすいことが指摘されており、頻繁化・長期化すればするほど、被害生徒の辛さや痛みは大きくなっていきます。

(2) 日本は他国より、「傍観者」の割合が多く、「通報者・仲裁者」が少ない
いじめを止めるには第三者の介入が重要になってくる。「いじめを止めてほしい人」とい
うのを尋ねたところによると下のように特に、友人、担任、保護者の名前が挙がるようだ。

いじめをとめてほしい人



森田洋司ほか『日本のいじめ』(金子書房、1999)より

いじめ研究者の森田洋司は、いじめについて考えたための基礎的な枠組みとして、「いじめの四層構造論」を唱えた。これはつまり、いじめは常に「いじめっ子」「いじめられっ子」「観衆」（周りではやし立てる者）「傍観者」（見て見ぬふりをする者）が関わっているという見方である。この見方にのっってみると、友達に止めてほしいというのは、要は「傍観者」を減らし、言うならば、「通報者・仲裁者」を増やしてほしいということになるのだ。

クラスの誰かが他の子をいじているのを見たときの対応の構成割合

対応	平成16年	平成21年						
		総数	男	女	小学生 5~6年生	中学生	高校生等	就職・その他
総数	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	-
「やめろ!」と言って止めようとする	18.0	16.9	21.6	11.6	24.1	13.4	15.1	-
先生に知らせる	21.4	25.7	26.1	25.3	39.7	25.1	14.8	-
友達に相談する	36.2	36.4	25.9	48.0	22.1	39.7	44.3	-
別に何もしない	24.4	21.0	26.3	15.1	14.1	21.8	25.8	-

注)「高校生等」とは、「高校生」、「各種学校・専修学校、職業訓練校の生徒」の合計である。

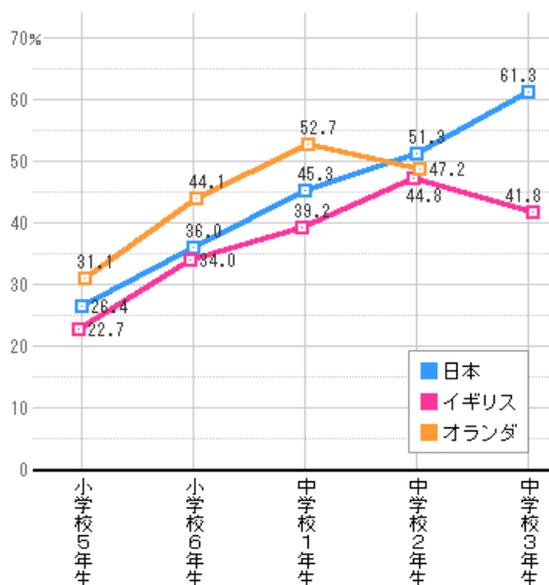
厚生労働省『平成21年度 全国家庭児童調査』より

<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/72-16b.html>

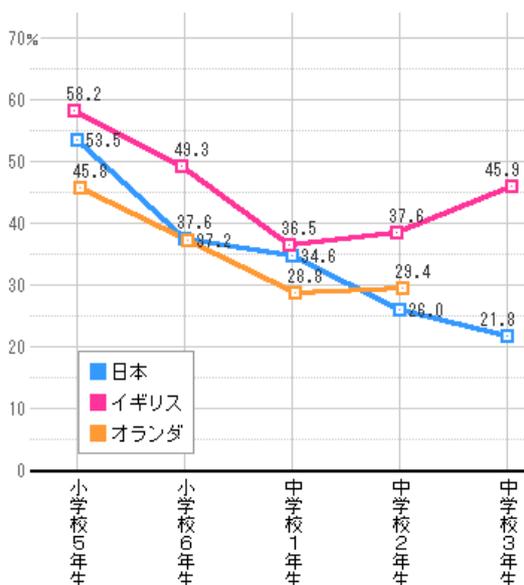
しかし、厚生労働省の調査からは、小学校から中学校にかけて、「仲裁者」（やめろと言って止めようとする）と「通報者」（先生に知らせる）が減少し、「傍観者」（別に何も

しない)の割合がふえていることがわかる。「傍観者」が増加するということは頻繁化・長期化しやすい中学生のいじめをますます深刻化することにつながる可能性もあるのだ。

「傍観者」の出現率の学年別推移



「仲裁者」の出現率の学年別推移



国立教育政策研究所・文部科学省編『平成 17 年度教育改革国際シンポジウム「子どもを問題行動に向かわせないために ～いじめに関する追跡調査と国際比較を踏まえて～」報告書』より

<http://www.nier.go.jp/symposium/sympoH18/h17sympo18221j.pdf>

こうした傾向は国際比較においてより顕著だ。イギリス、オランダ 2 か国との比較を行った場合日本以外の二か国は、中学生から「傍観者」の割合が減少しているのに対して、日本の場合むしろ増加してしまっているのがわかる。その一方で「仲裁者」の数は減少し続けていることがわかる。ただし、国際比較は単純比較できないことに注意が必要だ。なぜなら日本のいじめと海外のいじめと比べて「暴力的ないじめ」が少なく、「コミュニケーション操作系のいじめ」の割合が多いため、「仲裁者」「傍観者」の意味なども変わってくるからだ。とはいえ、中学校時代において「仲裁者」「通報者」を増やすことができるかどうかというのは、いじめをなくすための課題の一つであるといえる。つまりそれは、早期段階で介入しやすい環境作り、いじめを通報しやすい学校作りが求められるということなのだ。

Ⅲ いじめの心理

いじめは精神的な問題が絡んでおきるものだ。例えば、中学校に通うA君は生まれつき障害を持っていたとする。普段の学校生活の中で他の人とは違う行動をとったりちょっとしたことで他の生徒ともめるなどしばしばトラブルを起こすことがある。そのような場合、A君はいじめのターゲットにされるだろう。そもそもいじめは他人と違う人や弱い人を見下したり下に見て馬鹿にしたりすることで起きるのが多いのだ。

(1) いじめられる側の心理

いじめを受けた子どもは、なかなかそのことを親に言わないものだ。これにはいくつかの理由がある。まず親に言うこといじめの事実が先生を経由してクラスメートに伝わる可能性があり、そのため、その後の報復を恐れるからだ。たとえ親に訴えたとしても学校側の対応が不十分であれば、さらにいじめがエスカレートしていく可能性もある。また、どんなに苦しい状況でも、親に心配をかけたくない、あるいは、親を悲しませたくないと考えられる場合もある。今最も苦境に陥っているのはいじめられている本人であるにもかかわらず、それでも親の気持ちを共感的に理解しようとするのだ。さらに深い無意識のレベルだと、彼らはいじめられている現実から逃れようとする気持ちもある。自分がいじめられている事実を現実として認めたくないから心に大きな傷を負っているにも関わらず、親の前では「何でもない」というふりをしがちだ。そして、彼らにとって「自分がいじめられている」事を親に訴えることは、それを現実として認めることになる。このようにいじめを訴えない理由はさまざまだ。

(2) いじめる側心理

Ⅲ章の始めにも書いたが、いじめは「みんなと少し違う」ことで引き起こされるのだ。いじめる側の人たちは、その少しの違いが我慢できないのだ。どうやら「自分たちと少し違う人間がいる」という事だけで、大きな不安を生む時代になってしまっているようだ。学校におけるいじめの世界では、子どもたちは多様性（みんなと違う）の獲得とそれに伴う混乱を恐れているように見える。この混乱を避けるために彼らは常に「僕らはみんな一緒だよ」と確認し合って生きていかなければならないのだ。そして、バランスを崩す可能性のある要素は排除しなければならないのだ。

IV いじめをなぜなくならないのか？

いじめをなくするにはどうすればいいのか？第Ⅱ章ではいじめは昔から一定の数、存在し続けているということ、中学1、2年の時期に一番多いこと、そして、日本では「傍観者」が多く、「仲裁者」「通報者」の割合が少なくなっていることについて書いた。第Ⅲ章ではいじめを心理的な視点で考察するためにいじめられる側の心理といじめる側の心理を比較した。これらのことから言えることは、いじめをなくすのは非常に難しいということだ。Ⅱ章で触れたが、いじめをなくならない理由の一つに「傍観者」が多く「仲裁者」「通報者」が少ないことが挙げられる。もしいじめられていることを先生に報告したら今度は自分が標的にされるという恐れから迂闊には報告できないのだ。しかし、Ⅲ章に書いたようにいじめられている子もその後いじめがエスカレートするのが怖かったり、親に迷惑をかけることが嫌で誰にも相談できないのだ。ならば周りの生徒が行動して解決するしかないのだ。ここで重要になってくるのが環境作りだ。いじめをなるべく早い段階で解決するために早期介入しやすい環境作り、いじめを通報しやすい環境作りが求められるのだ。こうした環境作りがしっかりしていないからいじめはなくなるのではないのか？もちろんこれ以外にもなくなる理由はあるだろう。だが、私はこうした学校の環境作りが大きな原因だと考えている。では環境を作るにはどうすればいいのか？学校側が少しでも異変や違和感を感じたら相談に乗ったり周りの生徒から情報を集めるなどの行動が大切だと私は考える。いじめは学校側の対応が不十分だったために最初は小さな悪ふざけからどんどん発展し最悪の場合被害者が自殺というような末路になってしまうケースは少なくない。だからこそ私は学校側の迅速かつ的確な対応が環境を作るにあたって必要なことだと考えている。

V章 感想

今回の論文作成を通じていじめというものを改めて考えさせられた。なかなかこういう機会というものは多くはないのでいい経験になった。

【参考文献】

内藤朝雄『いじめの構造』（講談社現代新書 1984）

森田洋司『いじめとは何か』（中公新書 2006）

尾木直樹『いじめ問題をどう克服するか』（岩波新書 2013）

森口 朗 『いじめの構造』（新潮新書 2007）